大本山永平寺

眼蔵会（げんぞうえ）

しとしとと降る雨のなかに鮮やかに紫陽花が咲く季節となりました。六月中旬になると、今年で第百八次となる「眼蔵会（げんぞうえ）」が行じられます。これは、道元禅師が残された『正法眼蔵（しょうぼうげんぞう）』を約十日間にわたり学ぶ講座です。

「正法」とはお釈迦さまの説かれた真実の教えのことであり、「眼」はあらゆるものを照らし、「蔵」はあらゆるものを包み込むという意味です。道元禅師は、この教えを九十五巻にこと細かく分けられて、余すところなく説き尽くされるのです。

しかし『正法眼蔵』は現代の我々にとって大変難解であるため、行持綿密な特別な講師をお招きし、修行僧をはじめ諸役寮、山外からの聴講者等が一堂に会し、集中して研鑽を深めるのです。

この一日の身命はたふとぶべき身命なり
たふとぶべき形骸なり　（『正法眼蔵』「行持」上巻より）

この一日の命を仏の御教えに随って生きる、一瞬一瞬を無駄に過ごさないよう行じていく。これこそが尊いことであると道元禅師は示されます。

上山して間もない者にとっては、道元禅師の御教えに触れる良い機会となり、安居（あんご）の長い者にとっても、日常の修行の在り方を見直す良い機会となるのがこの「眼蔵会」なのです。

大本山永平寺／０７７６－６３－３１０２

大本山總持寺

修復された總持寺祖院大祖堂

伝光会摂心と總持寺祖院の授戒会

入梅の時節となり、紫陽花が雨に映えるようになりました。

六月は「伝光会摂心」の月。本年は九日から十三日までの五日間にわたって行われます。これは、『伝光録』を参究するために摂心会（集中坐禅修行）と併せて行われるものです。

この春に上山した新しい修行僧にとっては初めての本格的な摂心会でもあり、一般の参禅者も参加することが出来ます。

『伝光録』は、總持寺開山・瑩山禅師が示されたものです。

その内容は、釈尊から仏法を正しく伝えられたインド・中国・日本の五十二人の歴代祖師方について修行の跡方や生涯が述べられているもので、曹洞宗の最も大切な聖典の一つであります。

また、四日から八日まで石川県の總持寺祖院に於いて、總持寺貫首・江川辰三猊下を戒師に峨山禅師六百五十回大遠忌並びに大祖堂震災（能登半島地震）復興記念の報恩授戒会が修行されます。

總持寺祖院で授戒会が行われるのは、昭和四十八年（瑩山禅師六百五十回大遠忌）以来実に約四十年ぶりのことです。特に今回は修復工事が完了した大祖堂で行われる最初の大法要となります。

その他、関東管区の予修法要が二日に總持寺で、北信越管区の予修法要が十九日に總持寺祖院で行われます。

大本山總持寺／０４５－５８１－６０２１

曹洞俳壇

選・村松五灰子

隣合ふ墓にもおはぎ彼岸寒

岩手県　**上沖　貞子**

評　「暑さ寒さも彼岸まで」とはいうがまだ寒さの残る彼岸詣でとなった。お隣はその気配はまだないようだ。墓といえども隣合うのもご縁。おはぎのお裾分けである。穏やかな優しさがこの一句の味わい。

水よりも風の冷たき白魚汲む

秋田県　**小田嶌恭葉**

評　春浅い二月ごろから体長五センチほどの白魚漁が始まる。透明で美しく生で踊り食いや、ポン酢、かき揚げなどで食べる。「水よりも風の冷たき……」とした白魚漁の表現が巧み。

◆**葬儀場雪の長靴許されよ**　福島県　西木　甚

◆**振り出しに戻るが如し大くしゃみ**　千葉県　蛭名　節昌

◆**ごそごそと湯たんぽ探す夜明け前**　愛媛県　能仁めぐみ

◆**夫逝きてひとりに広き冬菜畑**　大分県　武石富美子

◆**春愁や列島の空濁しける**　宮城県　小西　力子

◆**放射能消えろも混じる鬼やらひ**　福島県　大槻　弘

◆**少しだけ雪国の労味はへり**　奈良県　鈴木　重雄

◆**きこえないテレビつければ雪げしき**　愛知県　中村ちゑ子

◆**夕刊やうぐひすの声はたと止み**　静岡県　島田　イネ

◆**筆太の縁（えにし）の一字灌仏会（かんぶつえ）**　愛知県　松井　暁見

＊選者吟

火あぶりの極刑鮎に何の咎

五灰子

＊作句小見

西木氏、かけつける縁者の心。蛭名氏、リセット。能仁氏、夜明けの寒さに。武石氏、広さが身に沁みる。小西氏、近くの国のＰＭ２・５。大槻氏、怒りをどこに。様々の暮らしの中から一句一句。

曹洞歌壇

選・長澤　ちづ

枯れ紫蘇の殻に飛び来し小雀がおのがおもみにゆらゆらとをり　三重県　野呂　と志

評　枯れ紫蘇が小雀の重みに耐えるその様子が、つぶさに観察されていて興味深い。そのような状況に出会うことのなかった人にも目に見えるようだ。しかも飛んできた小雀を主体に描写され、枯れ紫蘇との対比も鮮やかで生命感が息づく。

我が母のいつも着ていた割烹着ポケットふくらみ染みも目立った　奈良県　鈴木　重雄

評　母の割烹着が丁寧に詠われている。それは母への思いの深さとして読み手に伝わってくる。ポケットのふくらみは家族への心遣いに比例し、染みは無私の心の表れのようだ。

◆良寛の海越え来る朱鷺三羽雪の野原に鳴く声落とす　新潟県　星野　三興

◆越冬のはたはた漬けの樽の底見えて秋田に春のちかづく　秋田県　小田嶌恭葉

◆風知らぬ部屋の水仙丈きそう沈黙守る他に術なし　愛知県　田中　澤子

◆時として苦労ばなしは笑いぐさ乾びし飯を噛むが思いす　静岡県　土屋　君江

◆友と飲む約束の酒封切りてひとりで酌みぬ遺影の前に　岐阜県　後藤　進

◆「こんな時どうしますか」と知恵欲しく心ひそかに母を呼びいる　静岡県　青山　清子

◆下着類パッパとたたいて竿に干す母さんのように冬の太陽　山口県　横川美代子

◆臘梅の香りほのかな今朝の庭いいかおりねと空耳にきく　鳥取県　峰地　三義

◆水明の信州で水買って飲むそんな時代を夢にも思わぬ　長野県　太田　舛次

◆風寒く遠やまにのこる斑雪城下の家並の春を待つ庭　山口県　中井　清子

＊選者詠

目に見えぬ春の鐘楼そらにありごおんごおうんとなにかうながす　ちづ

＊作歌小見

峰地さんの空耳はだれのことばだったのでしょう。伏せられているだけに想像がふくらみます。聞香という優雅な遊びをこの歌から思い出しました。拙歌も春の気配が運んできた鐘のひびきでした。